

平成21年6月18日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19592598  
 研究課題名（和文）地域虚弱高齢者の介護予防的コミュニティ構築に関する研究  
 研究課題名（英文）A Study of Constructing an Elderly Preventive care System in the Community  
 研究代表者  
 尾形 由起子（OGATA YUKIKO）  
 福岡県立大学・看護学部・准教授  
 研究者番号：10382425

研究成果の概要：本研究の成果として、市町村保健師の見えにくい介護予防推進における専門技術として、①コミュニティ形成のための地域住民に対する啓発に際しては、把握した生活課題を誰もが見やすいように資料化することから始める。②地域住民の中から協働者となりえる人を探し、その住民へ役割遂行を勧める技術を使う。③活動を継続的に進めるために、協働活動を行う住民に対し自発性を高める方法で共に活動を展開することが明らかになった。他地域への適応として、介護予防的システム構築を図るには保健師と地域の協働者との活動を中心にすえ、既存グループとの調整から始めることが重要であることが確認できた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学

キーワード：地域虚弱高齢者 介護予防 コミュニティ

## 1. 研究開始当初の背景

高齢者の介護予防対策は、国を挙げて取り組む重要課題の一つである。介護保険法がスタートし、介護の社会化という目的は達せられたものの、要支援や要介護Ⅰなどの軽度者の状態改善や重症化防止に際し、これまでの介護予防事業は、介護保険認定率には反映できていないのではと反省があげられている。そこで、介護保険法の改正として、各自治体

に地域包括支援センターを設置し、介護予防を強化する動きになっている。介護予防の一次的な予防のためには、住民組織活動を強化し、集団による予防活動への展開が必要であり、また、二次的予防のためには、虚弱高齢者に対し個別支援と集団支援を併せて行うことにより、生活に張りを持たせ活性化させることにつながると考える。コミュニティが

崩壊し、人間関係が希薄化している中、後期高齢期を迎える前になじみの関係性を構築し、閉じこもらずに前向きに生活できるよう支援していく必要がある。保健師は、保健分野だけでなく福祉分野へも配置され、地域包括支援センターでは、医療機関や福祉領域にいる介護保険施設などとの連携も必要となり、その関わりを通して、地域支援事業の推進が期待されている。しかし、現行では、介護予防給付の個別マネジメントが中心業務として追われ、介護予防のための住民組織活動の強化を行う地域支援事業の展開がなかなか困難な状況である。

## 2. 研究の目的

市町村の保健師が地域住民と相互にエンパワーメントされる市町村支援モデルを開発し、さらに、旧産炭地への介護予防アプローチ方法を検討することである。

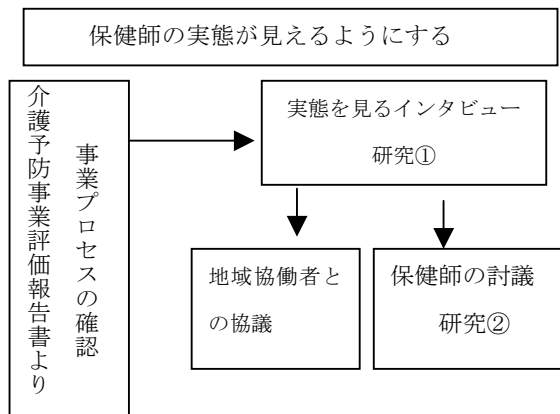
## 3. 研究の方法

### (1) 方法及び研究活動のプロセス

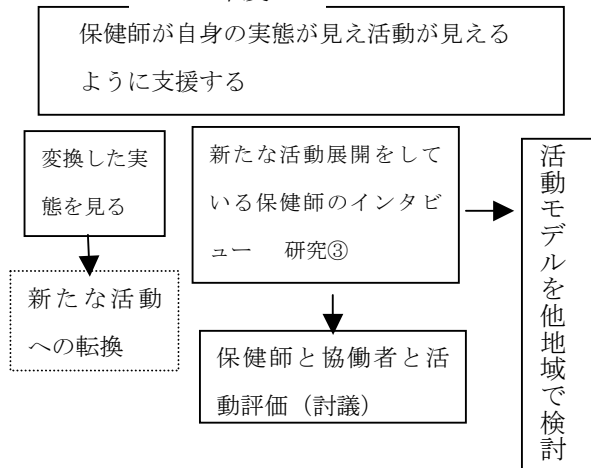
活動する③さらに活動を見直す。

〈 活動のプロセス 〉

H 19 年



H 20 年度



### (2) 研究対象事業（研究①及び②）

K 市が従来から取り組んでいる機能訓練事業や転倒予防教室、骨粗鬆症健康教育など、重複した内容の事業を再編し、生活機能低下を予防することを目的に『元気でハツラツ健康アップ教室』として実施した。併せて、地域の健康づくりや介護予防活動の中心的役割を担う住民を育成・支援し、地域でグループ活動を自主的に展開することを目的とした事業である。

### (3) 情報提供者（研究①及び②）

- K 市の介護予防モデル事業を企画した4名の保健師。平均年齢：35歳，教育歴：看護教育は大学卒1名、保健師専攻3名，経験年数：11.3年，事業担当年数2年間。
- 研究③は、K市の地区全体の健康づくりモデル事業実施した保健師1名，経験年数15年，事業担当年数2年間。

### (4) データ収集法及び分析法

- 研究①は、半構成的面接法を行い、1時間半程度、面接場所は、保健師が所属する行政機関内の会議室。分析は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考にした。
- 研究②は、フォーカスグループインタビュー法を用い、2時間半程度、面接場所は市内公共施設（和室）であった。分析は、質的内容分析をした。
- 研究③は、半構成的面接法を行い、1時間半程度、面接場所は、所属する行政機関内の会議室であった。分析は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考にした。

## 4. 研究成果

(1) 研究①のK市保健師インタビューより抽出されたカテゴリーリストについて

### ①上司と介護予防の視点を検討する

保健師の感覚で進めるのではなく、事業を進めるための職場内の関係づくりを行う。

### ②地域のキーパーソンとなる人としっかり

## と結びつく

事業展開する上で、地域の生活状況や地域の中で中心に活動している人々とつながる。

### ③疫学的な手法を用いて校区の健康データを分析して示す

疫学的データを示すことによって地域住民に対して自分たちの地域で起こっている課題に気付いてもらう。

### ④(地域のおばちゃん情報と個々の事例のアセスメント情報をあわせて)地域の生活情報を把握する

人間関係の密度や質、家庭の経済事情等、住民の話から、個別の情報を重ね合わせアセスメントし、地域に潜在化している情報を把握する。

### ⑤高齢者が集まりやすい会場を確保する

虚弱高齢者の行動範囲から、集まりやすさや活用されやすさを検討し、場所を決め活動を開始している。

### ⑥口コミで高齢者を集める

虚弱高齢者は、健康的な高齢者に比べ活動範囲が狭くなっている。虚弱高齢者を民生委員や福祉協力委員と協力し把握を依頼する。

### ⑦地域の協働者が負担にならないように頼む

キーパーソンは人望や行動力があり、老人会、婦人会、町づくり協議会等の役割を重複しており、負担が大きくなりやすい。その負担へ配慮し活動が継続できるようにする。

### ⑧現場の動向を把握する

事業推進にあたり、不満を持っていないか、満足して活動しているか、関わる人の思いを把握する。

### ⑨最初に考えていた内容と現実とのズレとのすり合わせをする

虚弱高齢者のイメージとして、骨関節疾患罹患者が多く、個々の日常生活動作をアセスメントにより全体メニューを修正する。

### ⑩健康問題を抱えながらも参加している虚弱高齢者の体に対し配慮ある関わりをする

虚弱高齢者は、疾患や副作用により身体の不自由さや倦怠感などの状態を抱えながら参加している。丁寧な観察と配慮を要する。

### ⑪高齢者同士が顔なじみの関係づくりができるようになる。

虚弱となった高齢者は、進んで事業参加して来る者は少なく、参加を躊躇しながらも、民生委員者・福祉協力員等の個別の声かけにより参加している。参加者同士慣れない関係の中、緊張感を持ったままでは足が遠のいてしまう。参加者同士の関係がなじみの関係になっていく工夫を促す。

(2) 研究②は、事業担当保健師に対し介護予防企画活動に対するアクション(研究②:保健師が自身の実態が見え活動ができるように支援する)

#### ①アクション内容

研究①の分析結果より、11のカテゴリーを抽出し、その内容についてディスカッションした結果

【上司と介護予防の視点を検討する】については、K市全体で検討した内容をさらに、各区で実際の地域や対象者を想定しての検討を始め、モデルをどの地区で行うのか、対象者として虚弱高齢者をどのように誘うのかなど、職場での検討を十分行う。

【地域のキーパーソンとなる人としっかりと結びつく】については、まず、市民センター館長へ会うことが、地域で事業展開する上でのポイントである。また、協働活動を進めるうちに、民生委員、福祉協力員などと話しやすくなり、情報を提供してくれるようになる。

【疫学的な手法を用いて校区の健康データを分析して示す】については、協働者へ町内別のデータを示すことによって、普段何気な

く暮らしている地域について興味を持ってもらい、課題に気付いてもらう。

【地域の生活情報を把握する】【現場の動向を把握する】

昔農家だったとか、集合住宅や一軒屋など地域の環境に関する情報からも近隣との関係性を見る。歩いたり、自転車で通ったりし、地域の見えにくい生活情報を把握する。

【高齢者が集まりやすい会場を確保する】

【口コミで高齢者を集める】については、虚弱高齢者の行動範囲は狭く、広報だけのPRでは参加は難しいため、高齢者が集まりやすく、活用されやすい場所を探す。虚弱高齢者を把握している民生委員や福祉協力委員に協力を得て出向いていこうという気持ちになる声かけをする。

【地域の協働者が負担にならないように頼む】については、キーパーソンとなる協働者に、大きな負担感を感じさせずに、活動の継続を促す。

【最初に考えていた内容と現実とのズレとのすり合わせをする】【健康問題を抱えながらも参加している虚弱高齢者の体に対し配慮ある関わりをする】については、高齢者の健康度や疾患の状態を踏まえ、事業の見直しが必要となっている。虚弱高齢者のイメージとして、循環器疾患罹患者が意外に多く、内臓疾患によるケアを重視した援助方法の検討も必要となる。

【高齢者同士が顔なじみの関係づくりができるようになる】については、進んで事業に参加する高齢者は少なく、まず、保健師は名前を覚え、声をかけたり、集合写真を撮る等、参加者同士がなじみの関係になるよう支援する。

(3) 研究③新たな活動展開をしている保健師のインタビュー結果

研究③の目的は、高齢者の介護予防も視野

に地域づくりを支援している保健師の支援技術として抽出したカテゴリ。

【事業を始める前の共通の基盤づくりとして、地域のキーパーソンとなる人としっかりと結びつく】

【健康づくり事業に関わってもらう人や関係者を選定する】

【地域の中の見えにくい人間関係、体質みたいなものを把握する】

【自分たちで動きやすいように、準備調整し、自分たちの地域の課題に自分たちで気付くような関わりをする】

【校区の健康データの分析を通して、自発的な活動を促すように関わる】

【団体の長と声かけ隊(活動を広げてくれそうな人)を集めて、認知症対策班を結成する】

【その地域独特のやり方を把握する】

【自発的な活動を促すように関わる】

【次の活動に生かすために、気付いたことを言語化してもらう】

さらに、他地域への適応について、旧産炭地の2グループのインタビューを行った。

共通項目として、【活動内容を住民に合った形に工夫している】、【地域での活動を進めるには、行政の役割や公民館の活動を見直して、住民を支援したい】【高齢者を集団の活動につなげるには、個別の声かけをしないと活動は起こらない】【自分自身や家族の介護を見越して、「人ごとでない」と思うから行える】と住民としての声が上げられた

#### (4) 考察

介護予防事業開始前から企画運営に至るまでの技術を中心に考察し、研究方法として用いたアクションリサーチによる考察も併せて行った。

#### ①保健師の事業展開に対する技術

事業参加者間にグループダイナミクスを起こし、継続参加しセルフケア能力を高め

る方法を試みた。保健師が体験した事業経験、住民活動への認知や職場内での関係づくり等が影響を与えていると思われる。今回の調査対象保健師は、佐伯らの調査の後期中堅期にあたり、施策化に向けての事業展開が可能となる段階にあった。組織化への活動が必要であるが、中堅に至るまでの地域での事業経験が必要である。

#### ②保健師が捉えている介護予防における健康課題の分析方法

介護予防事業の企画をするにあたって、まず、地域の状況を既存資料で確認し、情報からでは見えない生活状況について地域を良く知る関係者から聴き、地域全体の健康課題と関連づけて検討していた。

#### ③地域ニーズに合った介護予防事業の企画

介護予防事業を企画する過程として、事業開催を広報でのPRだけでなく、地域のキーパーソンを見つけ信頼関係を築き、協働者となりえる人々（民生委員、健康推進委員、運動推進委員等）と課題を共有している。その課題は、地域包括支援センターの保健師と地域ケア推進に関わる保健師とが連携を図りながら、介護支援専門員の事例から見える個別課題を地域全体の支援を視野に検討しておくことが重要である。

#### ④効果的な介護予防事業の運営における保健師の技術

事業実施過程として、虚弱高齢者は活動範囲に制限があり、協働者の力を借り、個別の誘い出しを依頼した。その協働者の活動に対し、保健師は活動を労ったり活動範囲を決めたりと負担を軽減していた。参加高齢者の緊張感を取り、なじみの関係を構築している。事業内容については、虚弱高齢者は骨関節疾患罹患患者とは限らず、実際は循環器疾患等罹患患者も多数参加しているため、メニューの柔軟な修正をしている。

#### ⑤事業継続に向けた協働者の育成や地域意識の向上に対する保健師の支援方法

介護予防事業の継続のためには、住民の健康意識を高める活動の展開が必要である。地域住民との共通課題を持つことである。

その活動開始時に地域でのキーパーソンと挨拶し、地域の様々な委員会の幹部会へ顔を出し、関係づくりが確立する。信頼関係が確立したと捉えた時期に、地域の組織から人選し健康づくりのための会の発足につなげる。次いで、組織づくり開始時には、メンバーと地域の健康課題を確認するためのデータを作成する。地区の調査など住民自らの力で入力し、課題を見い出せるようにする。その発見が動機づけなり、会のテーマを掲げることにつなげ、活動展開は、メンバーの人脈による口コミで地域独特の方法で情報伝達がなされ、活動の広がりをもたらししている。

保健師は常に「自分は、あくまでも、みなさんのお手伝いをする立場」と伝え、住民の自発的な活動が継続するよう支援していた。住民の傍らにおいて、困ったときや活動が停滞しそうなときは、一緒に活動していた。

健康づくり活動を展開する保健師は、介護予防事業担当の保健師との視点の違いとして、介護予防事業の企画運営の視点でなく、町全体の生活を視野に入れた住民主体の活動展開を図ることに主眼を置いていた。

保健師は、自発的な活動を支援するために、「住民の力量を高める能力」が必要であり、住民に対する力量形成技術を持つ必要がある。

#### ⑥旧産炭地への介護予防的コミュニティ再生の試み

旧産炭地において、組織的活動を推進することを検討した。経済基盤が弱く、福祉への依存が高い状況であるが、地域内では、10年前から運動推進委員の活動が行われてお

り、各地区の老人会の主催する会で活動している。前述した保健師の育成したボランティアとの協働方法を検討し、地域での健康づくりのための組織的な活動へと展開させていくことは可能である。

⑦アクションリサーチ法による保健師の専門性の明確化

本研究では、介護予防事業を企画している保健師の事業開催までのプロセスをインタビューにより分析し、地域において、虚弱高齢者に対する効果的な予防的活動の展開方法を探った。その活動が介護予防に反映されたか、保健師の認識が深まったかを評価することは十分行えなかったが、研究②の分析を踏まえ、活動に反映されて方向付けはできた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①尾形由起子, 介護予防事業参加者の自己効力感に関連する要因, 福岡県立大学看護学部紀要. 2009

②尾形由起子, 山下清香, 松浦賢長, 児童生徒と保護者の薬物認識状況と薬物防止教育のあり方, 福岡県立大学看護学部紀要. 2008

[学会発表] (計2件)

①尾形由起子, 山下清香, 他, 地域完結型特定健診・特定保健指導の構築にむけての保健指導方法の検討, 第67回日本公衆衛生学会. 2008

②尾形由起子, 岡田麻里, 地域虚弱高齢者に対する介護予防における保健師の支援技術の検討, 第27回日本看護科学学会. 2007

[図書] (計1件)

井上千津子, 澤田信子, 石井享子編集, 尾形由起子共著, 介護過程, ミネルウァ出版. 2009

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾形 由起子 (OGATA YUKIKO)  
福岡県立大学・看護学部・准教授  
研究者番号: 10382425

(2) 研究分担者

山下 清香 (YAMASHITA KIYOKA)  
福岡県立大学・看護学部・講師  
研究者番号: 40382428

安酸 史子 (YASUKATA FUMIKO)  
福岡県立大学・看護学部・教授  
研究者番号: 10254559

夏原和美 (NATUHARA KAZUMI)  
福岡県立大学・看護学部・准教授  
研究者番号: 00345050

(3) 連携研究者

なし